

ampp-014

それはまるで毛布のなかの両手みたいで

中田満帆

a missing person's press

2021

★★★★★★★★

6月

だって、もう、だから、(PM20:59)

電話

水門（あるいは賞レース）

地下鉄

ニューオーリンズ

河の暗いところで

置き手紙

I'm waiting for a man

レゾナンス

コラール

祈り

mind out

missing

still hate

fact

dance

多くのひとは

in without way

それはまるで毛布のなかの両手みたいで

夢の定着液

★★★★★★★★

著作・装丁・発行人／中田満帆

発行所／ a missing person's press

〒 651-0092 神戸市中央区生田町 1-1-13 新神戸マンション北館 303 号

078-200-6874 / mitzho84@gmail.com

6月

哀傷というのか、輪郭というのか、とにかくそんなものに搦まれて、
おれは身うごきできなくなってしまってる
電話帳の最後に記された番号と、
いずれだれもかれもがいなくなるという事実
遠くまでひとがる溝の澱でいま
6月が燃えあがる
そして医者という
——アルコールをやめて、やっぱり元気そうだね。これからもつづけよう。
いまおれは4週めに入った、カティサークがなつかしい、
スコッチ・アンド・ミルクが愛おしいって
小麦色の畑のなかを男がひとり佇んでる
猟銃、そして抱えきれない混沌、
ついでにコンバーティブルのフィアット、
暗号のような温かい脳震盪
やつの弾は不機嫌だ
水がどんどん天を充たす
おれは電話をかける、
ミスタ・ナガヤス、
ミスタ・ヨシムラ、
かつて友人だったはずのものたち
それからテレビジョンを聴き、ひさしふりにものを書いた
湯浴みして睾丸や亀頭を水で冷やし、
紅茶を入れる、
遠い、
どうしてそんなところに虹鱒が、
近い、
どうしてこんなところにテレビショーの司会者が、
どっちも蹴飛ばして田中修子の詩集を読む、
しばしユウコについておも^{おも}う、
かの女のいったことをぜんぶ懐^{おも}いだそうとする、

そうしておれがどこにもいないということを確認してみる。

だって、もう、だから、(PM20:59)

夜ふけの通りをわたってすぐに
光りのきれっばしが飛んで
ぼくに迫る
ブレーキ、
焦げるタイヤの臭い、
むかってきたのは 40 女の乗ったルノー
醜い皺をいくつもつくりながら
かの女は窓からかいなを突きあげて
怒り声をあげる
それはまったくの瞬間でしかなく、
ぼくはファミリーマートへいく
ところが気に入りにチョコ・クロワッサンがない
ぼくは餡デニッシュと黒酢の支払いを済ませる
なににも抛りどころがないことの清しさ
室にもどると電話が鳴ってる
でもぼくがとるまえに止む
だれから来たのかもわからない電話
だれかがぼくを呼んでるっていうめずらしさ
もしかしたら先週ぼくが送った本についてかも知れない
でもそれならメールが来るはずだ
メールはない
じぶんが求められてないと気づくだけの終日
ぼくはきのう映画を観た
『イングランド・イズ・マイン』
ステイーヴンっていう若者のはなし
かれはさ迷ってばかりいる
みんなは与えるものがなにもないからと、
奪ってばかりいる
ぼくにはよくわからない
England is mine, it owes me a living

But ask me why, and I' ll spit in your eye / The Smiths "Still Ill"

病んでるのかも知れない

でもぼくはいつておく

ぼくはだれとも口づけなんかしない

ぼくはルノーになんか乗らない

ぼくはあした仕事にいくつもりがない

きみの慰みはもうかつてのようにやさしくない

唇が傷みだす

また唇が痛みだすんだ

廚に立つぼく、

鉄のフライパンで焼きあがっていく卵、

こいつがぼくの脳味噌なのか？

どうか、ぼくの脳味噌にベーコンをひとかけら

どうか、ぼくの判断にゴーギャンをひとかけらを

そしていまいたいこの人生をぜんぶきみのせいにする！

電話

レイの母親としばらく話をしたのはもう5日もまえだ
やつはまだおれをうらんでるだろうかとおもう
でも、どうだっていいこと
やつもおれもろくなもんじゃないから
ふたつのけつに悲しい蠅がとまって
あじさいがゆれる、またゆれる
その振れ幅にしふく、
雨がしふく
詩を
おれは読まなくなった
3 ダースのウィルキンソンが
からっぽのまま転がってる
まだなにかしら書けることがあれば、そいつは余剰と空白でしかない
たがいの腋を嘗め合うようなやり口はごめんだ、すべて拒絶する
冷蔵庫もスーツケースもない室のなかで、
エゼキエル書をひらいてみる
49章の16節が気に入った
いま可能なものは過古と再会すること、
すでに知ってるものを手に入れること、
新鮮さはどこにもない、どれもが人生から遠ざける
せいぜいのところ、短い慰みにしかならない
レイと最後に交わしたのは携帯電話のショートメッセージで、
おれは「対等に話がしたいんだ」といい、
やつは「生活保護者と対等なわけがないだろう」とやり返した
それから5年経っておれは手紙を書いたんだ
やつのためにでなく、おれのために
生きてるあいだに成し遂げたい、
多くの飢えた裸体のうえで、
帝国を築くこと
ボルネアの星

借金を返そうと何週間もオートミールで喰いつなぐ
そして雨がしぶく、
雨がしぶく
おれは詩を書かなくなった
なにが写真かわからないように
なにが鉢植えかもわからなくなったんだ
男が両の手いっぱい鮭をかける
愛する女たちはもういない
丘のうえの窓に閉じこもって、
ひとびとの愉しみを嘲る
聖域はない
臥所はない
隠れ家もない
愛もなく、
弱さだけが暴露されつづけ、
中核都市の路上をさ迷う
必要なのは共犯者、
もしくは心の淋しい狩人か
ペパーミント・チョコレート、
レコード・プレイヤー、
レーシング・フォーム、
そしてシー・サイト・シティ、
なにもかもいけすかないね
なぜならみんなおれの詩みたいで、
なぜならみんな余剰と空白みたいで、
それでもともかくおれは電話をかけては切って、
沐浴する
神とともに祈り、願うことはしない
たったひとりであじさいに突っ込んで、
明けても暮れても、
ちがう顔を
探しつづける
これからも
ずっと、
靴下に孔があく

水門(あるいは賞レース)

あらゆるひとびとのなかでもっともうら寂しい部分を持ちだして、
ローズマリーの肥料にしたいからといって、
かの女が3階から飛び降りたのは、
10月のたそがれ
なにがどうってわけでもないけど、そんなことを懐いだす
パンピーどもも、業界のやつらも、そろって消えちまえ
できそこないのなづきで、なにもかもをとりちがえ、
じぶんの弱さに耐えきれなくなってる
すでにできあがった世界には
迎合したくない
和解もしたくない
だからぼくは詩人になれない
オートバイを分解してる地階の中年男、
その隣は洋書の店
もうずっとシャッターが降りたまんまで、
あそこで買ったカーヴァーの『炎』も、
チャンドラーの『長いお別れ』も、
ぼくはひらいてない
なにも学習しようとしないうまま大人になり、
そして老いていくばかり
もはやだれとも手を繋げない
やがてかの女はなにかに混じった異物みたいに路上から、
はるばる遺体安置所に送られるだろう
あまりにも冴えないとき
水門まで歩き、
配電盤をあける
そこにはいまだ読む価値が、
救いのあるものが、
書かれてある
賞レースからぼくは降りた

たったふたつかみつつ入選して
忘れられていくだけのために
ぼくは書いてるんじゃない
ガス料金を払わなくちゃ、
3月分が未納のまま
やがて世界の正午に焼き尽くされて、
炊きだしの列に加わるまえに
きみらに幸運を
そして、
ほっといってくれ。

地下鉄

水に充たされた花野であしたの仕事がないという事実を呑む
なんてこともなくダートを走り抜く馬みたいな勢いが要る
なのに空気の抜けたダッチワイフみたいにおれは存る
たまたま掴んだ書物と、たまたま掴んだ絵筆が、
しつこくおれを狙ってる、
どうぞ打ち落として、
そのままにして
欲しい
オーヴァー・スロウしつづける鳥影
じぶんが安全であって欲しいと願うだけでなにもできない
それでもおれの書いたものはたしかだ
なんのまちがいもなく、
おれがばかやろうだと暴いてくれてるから
ともかくあしたの仕事がない、
カボチャの検品が終わって倉庫はひまになってしまった
しばらくは廃棄のバナナとも会えそうにない
聴いてくれ、ルウ、おれはしくじった
心一条に打ち込める、そんなものを
おれは見つけられなかったんだ
雨あかりのなかで
花がひらくまで
これからは
じっとして待ちたい
どうか慈悲を
どうぞ軽蔑を
所有することに厭いてしまったんだ、ルウ
好まれることに厭いてしまったんだよ、ルウ
喰うことは外せないけれど、
そんなことのために働くのはもう終わりにしたいんだ、ルウ
おれは地下鉄の入り口まで歩いて、

溝に唾を嘔く、
だれかが顔をしかめる、
もう若くない白人女たちが通り過ぎる
おれは階段を降りて、
改札にたどり着く、
若い男と擦れちがう
どうしてなにもかもありふれた仕事みたいに終わっては消え、
そして現れるのか
あきらめておれは女学生たちを見る、かの女らは教えてくれる、
おれがいかにもボンコツの老いぼれだってことを
おれにはなにもできない
たまたま与えられた選択肢のなかで、
多くを求めすぎて、
なにひとつ得られない、
たったいま自転車がいちだいプラットホームへ降りてった。

ニューオーリンズ

ニューオーリンズの日々についてブコウスキーは語りたがらない
あるいは語るべきものがあまりないのか
5セントの棒つきキャンディを嘗め
空腹を抱え
書くためだけの時間を求める
あるいは子供たちに追われて、
酒屋のなかへと逃げ込む
果たしてすべてはおもいだされたのか

ニューオーリンズの子供たちは叫んだ
あの気味のわるいやろうをやっつけろ！
いつもキャンディを買う酒屋に隠れてかれはどうか生き延びた
そして子供たちはいなくてかれはいつもように鳩を見つめた
フランス風のなまえの鳩を
川があって
そのさきは入り江
雲がのろのろとうごいていくさきは
シーザーが刺されたころから死んだっきり
ニューオーリンズはかれにとっての悔しさなのか
岸のむこうのひとかげは
だれもかも水死人で
かれらが坐るのは
ブコウスキーの気に入りのベンチ
やつらと坐って
やつらの酒を呑む

河の暗いところで

きょうのためにできることの、その心許なさ
金が減ってものが増えるだけの、うしろめたさ
なにもないところからでて、なにもないところに帰るだけ
ところで存在するってわるいこと？
それとも善いことなのかを教えてください
男がいる、
河の暗いところで、
立ってる、
そして泣いてるように見える
どうだっていいけれど、
ぼくはぼくの亡霊でしかない
叶えられない祈りのなか、ぼくはぼくの指を握ります

もしかの女がこの室にいたらとおもう
もしかの女がぼくのなかを読んでくれてたらとも
でもぼくはもはやかの女のために書きはしない
かの女のために唄ったりしない
雲が水へ還るみたいに
かの女の姿はいつもおなじじゃない
ぼくがいる、
河の暗いところで、
坐ってる、
そしてみずからと戯れる
どうだっていいわけじゃないけど、
いまのところはなにもかも忘れて、
ラダーシリーズのレベル 1 から、
ロサンゼルス郡立博物館まで渡航します。

置き手紙

これだけのおもいを運んで来るのにかの女はさぞ大変だったろう
廚の火が消えてひなぎくが一輪ざしにされてしまったから
ぼくはどう応えたらいいのかもわからないまんまで
かの女のなかにいる、もうひとりのかの女の声を聴く
ぼくはかの女の手をとって荒れ地まで歩く
はるか誘導円木のまわるところで
口づけをして
笑ってみる
でも笑えないんだ
まるでリリオムみたいにぼくはかの女を突き放す
そして男歌を叫んで土に身を投げる
やがて零時を過ぎたころ、
ぼくらは列車に乗る
それで夢は終わる

かの女は置き手紙を書きかけたままで
どっかにいなくなった
もしかしたらまだ夢のなかにいるのかも知れない
ぼくはかの女のおもいをすべて受け入れる
——あんたってくそやろうよ、
わたしを利用するだけして、
もう懐いだしもしないなんて、
さっさとその木椅子みたいにばらばらにされてしまうがいい。
ぼくはかぼやく、
そいつはありがとうだ、と
昏くなりかけた通りをひとり歩き、
時刻表を読む、
読むふりをする、
列車が過ぎ去った、
ぼくらは列車に乗らなかったんだ

やがて夢が始まる。

I'm waiting for a man

ひどい週末だった、なにもかもを懐いだして、
かれはふいにモーゼルの照準を合わせる
おもちゃの銃を遊び、なにかを忘れようとしても、それはあがきだ
やがてかれがぼくに電話を掛けてくるという論証もないではない
かれはいった、哲学は手段だと
こうもいった、手段を増やしつづけるしか生きる道がわからないとも
なんにせよ、ぼくはかれのことを切り離せないでいる
古着みたいな共犯関係のなかで、
ぼくとかれは韜晦する
室をでても
いくところがない
それでも歩き、
それでもなお走る、
きっとかれはぼくを必要とはもうしないんだと、薄々感じながら、
黄色くなった植物をいっぼんいっぼん引き抜いていく
それからけっきょくぼくは室にもどる

電話が鳴った
ぼくは手を展ばさない
電話がやんだ
かれが来るのを待つ
えらく慇懃な信号が窓のむこうで瞬き、消える
静まりかえった悲しみになにを与えるのかを撰ぶ
哲学は悲しみの解毒剤になりうるとシオランが書いてた
存在するってことが、いっこうに実存になってくれないからか、
ぼくの咽が渇く
ぼくの脳が渇く
ひどい週末だった、なにもかも懐いだす
ぼくは初めて盗みをして、
かれは初めてひとを撲った

追いつめられて道をわかれ、
やがてふたりを閉じ込めた壁がいま、
室の真んなかまで迫ってる
ぼくがまだかれを待ってるのにもかかわらず。

レゾナンス

そのわけを聞かせて欲しいんだってぼくはいった
それでもかれはなにも答えなかった
いったいなにが始まるのか、
終わるのかもわからないままで、
階段の踏み板を踏む
鉄が軋む
どっかで花火みたいに警報が鳴る
それがなんなのかもわからないままに
ぼくはふりかえり、
かれはふりむかない
きみならどうして、こんなことになってしまったのかがわかる
でもぼくはいまのところきみにいったりはしない
どうか黙っててぼくのそばにいて欲しい
星霜が降る、
屋根を貫くみたいに降る、
ぼくはなんにもできなくなってだれかを呼ぶ
その声は曖昧だ
どこに一步踏みだせばいい？
もし田舎の一本道で迷ったらどうするればいいのか
きみならどうする、
蘇ることの、
煩わしさ、
騒ぎのなかで手を延ばしても、
だれもなにもなかったとき、
ぼくはまだギターを触ってるのか
ぼくはまだトリルをやってるのか
ああ、たやすいことだ、すべて、
きみがここにいないようにして、
ぼくがかれを殺してしまうんだ
うたかたの世界で、

ふたりきりでできるのはそれだけ

#Yeah!

#Yeah!!

#Yeah!!!

掴まる場所がない場合は、じぶんの魂しいに手をやって、

祈るか、叫ぶか、奪うかして、

寝るなり、焼くなりする、

そしてもうきみのことなんか、

ぼくも忘れて、

互いに忘れて、

どうぞ悲鳴のなかでタッピングしてしまえ！

コラール

ぼくがいたいのはそういうことじゃないくって、
たとえば蛍火が夏のラインをかすめていったあとの、
そのガードをいまちど確かめたいんだっていったあのとき
夏草がえらく繁った港町の稜線、
車が遠ざかる一瞬、
光りが光りでなくなる一瞬、
つまりはそういったもろもろを見、
確かめたいんだって

ぼくの位置のふたしかさ
きみの未来のふたしかさ
見えるものすべてのふたしかさ
そんなものが中空に飛来している
なあ、どっかへ遊びいこうよ
でも、きみはちがうという
ぼくがいたいのはそういうことじゃなくって、
夏がはじまったとたんになにもかも落ち着かなくなっていて、
あらゆるところで翅をふるわせるみたいに存在してるってことなんだ

ぼくはそれらをたしかめる
きみはたぶんそんなことはかまやしない
緑色の熾きが澱のように重なるとき、
ぼくはたったひとりきみのために
トースターの電源を入れる
そして朝餉のなかの、
ふたしかさのなかで、
たぶんきみが幸福であればいいなんてことを
かぼやいたりするんじゃないかな？

祈り

なにもかもが融け合うみたいで、それでもけっきょくすれちがうだけ
やがてきみをぼくが発見するという論証はなく、
かれがでていって帰らないという仮説が、
頭をもたげるんだ、
だから週末のモータープールで、
ぼくはうつくしくも祈ったんだ
ぼくはあさましく祈ったんだ
花が落下する、
もうじき発電が終わる、
どうして男のさがはこんなにもぐずついてんだよ
かれの青い眼がいつもより、青かったせいか
ぼくはたださみしいだけの男だった
ただ猜疑のつよいだけの男だった
やがてほとりに立って、
いままでの営みと、
欲望を棄てる
心をひとつ
犯されながら、
ついに帰って来ない、
かれもぼくもきみもだ
ぼくは腹をすかして、
ぜんぶがぜんぶ凍結した世界をおもい、
土を嘗める、
河を嘗める、
けっきょくはすれちがうで終わってしまうものたちのなかで、
紙片に書きつづける、おもいついたことを、
どうせだれも読みもしない
それでもいい、
だってこれこそがきみがぼくを発見するという論証なんだよ、
でも祈りを検証することはできないだろう

夏草がなびく

風になる

みんながそれぞれじぶんにしてやれることを忘れてる、

そんな夜があればいい、

あればいい。

mind out

おもいはさかる、
きみのことが好きで
いつか会えるとぼくはおもってた
でもそれはまちがいで、
ぼくはみずからの熾きを消す
じぶんのなかで永遠みたいにつづく、
過ぎ去ったものへの恋着や、
マイナー性やなんかになんか厭気が差したんだ
休日の静かな路次、
足を痛めて、
遠くまでいけないとき、
身もたえることもなく、
ぼくは坐ってる
やがて沈黙のまわりを巡回する警備員たちが、
ぼくを発見してくれることを願いながら
なにがうれしいのだろう
なにが淋しいのだろう
いったいなにが欲しいのだろう
虚名にうなされ、
事実を見失ったかげたちがいま、
それぞれの立ち場で、その身の切なさを磨いでる
いったいなにができたというのだろう

おもいはさかる、
まちがったところで
ぼくはきみのことを懐いだす
投げたボールがいつも返って来ないむなしさの澱で、
ぼくはみずからの熾きにすぎる
自身のなかで延々と疾走しつづける、
迷いや欲望に喘ぎながら、

この地下生活に甚だ厭気が差す
休日の通り
だれもない町
足を痛めて
なにもできないんだ
やがて身もだえるような懈さに
ぼくはすっかり負けてしまうんだ
なにが思慕だ
なにが憬れだ
きみのステップがぼくのなかで踵を打つ
ぼくのステップはきみにはとどかない
いったいなにが欲しいのだろう
虚名に曝かれ、
物語を見失ったかけたちがいま、
それぞれの地獄で、その身の醜さに耐えてる
いったいなにができるというのだろう
はらからよ、
おなじように地下のなか、無名のままで、その表現とともに忘れられ、
かえりみられることもないひとよ
気をつける

missing

for yuri nakakubo

なにをやりおおせようともかの女にはわからない
なにをしでかそうがかの女にはかかわりがない
もはやかの女がどこにいるのかさえも
わからなくなってすでに 10 年が過ぎ、
ぼくは夢のなかで
OSS へと
あの倉庫へと
急ぐ
もういなくなったかの女に与える辞を探しながら、
急ぐ
もうじき去ってしまうかの女に伝える辞を探しながら、
焦る
夢の倉庫は照明器具を扱ってる、
ぼくは 1 階の出庫口から小さなエレベータを使って、
2 階へといく
かの女はそこでぼくと働いてたんだ
フロア主任がぼくを怒鳴る、
そして追いかける
ぼくは走る
やがて暗がりのなかでピッキングのリストがちばらり、
鬱病の男がぼくを掴まえていう、
きみはぼくの息子にそっくりだっていう
突き放してフロアの奥へ走る、
主任は気味のわるい、
口のわるい、
品のない男で、
あんなやつになんか負けたくない
でもおとついぼくはかの女にわかれをいって、
そして翌る日、ふけたんだ

それでクビにされた
でも、
いまはかの女は映画のなか、
もっとわかいころのかの女が映画にでて、
スクリーンの裏手まで、
ぼくはいった
5階の男がさえぎる、
キンジョウさんがなにかいってる、
ケイシンや、もりか運輸、
信州名鉄 A と B やなんかのトラックがいっぱいで、
なにも見えなくなる
それでもぼくはかの女のなまえを呼ぶ
——ナカクボさん！
かの女が笑みを浮かべて立ってる
そこで眼が醒めて、
がっかりだ
おなじ町に棲んでたあの娘、
おなじ歳だったあの娘、
ミヤザキからきたあの娘、
バンドをやってたあの娘、
みじかい髪が愛おしくなるようなあの娘、
なにをやりおおせようともかの女にはわからない
なにをしでかそうがかの女にはかかわりがない
もはやかの女がどこにいるのかさえも
どうか教えてくれ、
かの女が倅せたかを
そうおもってふたたび、
ぼくはまぼろしを fall out してしまう
いつも、いつも、そしていつも、

still hate

for Reina Terao and Sayo Takeuchi

かの女の声はまるで電話線を通したみたいに聞える
かつてハネットがイアンの歌声を録ったみたいに耳に来る
なんだかずっとそばにいるみたいに聞えて来るんだ
それでもなお知らなかったとかの女はいうだろう
べつにそれがほんとうでなくともぼくは受け入れるだろうし、
だからって卑屈になることでもないにちがいない
ひとつがだめだからといって
ぜんぶを放りだしてしまふわけにはいかない
ちょうど夢が終わりはじめたあたりで
もう気にならなくていいよという
かの女はきっとぼくを欲しがったりはしない
通りに置きざられた車のなかでいま、
毀れたシンセからのリフレインがしてる
土鳩が羽を休め、猫が駐車場へ消える
そして審判が下される、
19日も仕事をしなかった罪で
労働はたえまない自我の放棄でしかないのに
ぼくは意識のなかでもがく
他人がじふんと重ならないように
じふんが他人と重なってしまわないように
でもそれは恥ずかしいこと
みながみな他人とじふんを重ねたがり、較べたがる
ぼくはもうそんなことには厭いてしまって、
とにかくあそこから逃げだしてきたんだ
モッキンバードを啜えてこの室に退避してきたんだ
もはやどこにも帰りようがない
もどる場所はない
母さん、
ぼくはこれでもがんばっているんだ
あなたが生存するという論証などいらない

あなたが埋葬されたという報せが欲しい
それならあの男みたいに教誨師を追い払うことだってできるのに
かの女は嗤った
まるで鏡のむこうにいるみたいに
かの女はぼくを見ない
それでも声だけはぼくを捕らえる——かの女はいう
知らなかったわけじゃないけれど、
あなたがあんまりかわいそうだったから、
もっといじめたくなっただけ
勘違いしないで
他人を苛むことで慰みを憶えたりはしなかった
ただわたしは大人になったということよ
あなたはみすぼらしかった
いまだってそう、
でも少しましかもっておもう
いまあなたが書いた辞が
だれかを傷つけても
わたしには無関係
だから早く、
わたしのことなんか、
懐いださないで
気持ちわるい
死ねって。

fact

午前 8 時から午後 4 時と半分までおれは港湾労働をやってた
でもある瞬間、なにも信じられなくなった
かれらがなにをおれに求めているのかが
わからなくなってしまった
おれはうろたえて
バナナの函を落としてしまった
だれかがおれを見てる
なにも信じられない
冷蔵倉庫はうす暗くて
冷房が寒いくらいに効いてる
おれはおもった
見つかってしまったと
バナナの緑があまりにも緑で、
それを計量したり、包装したりする女たちは青い
高い悲鳴みたいな音を発てながらフォークリフトが走る
おれはようやく函をあけてバナナをテーブルに並べる
どうしたものか、心が入らない、どうして、
どうしておれはこんなところにいるのかが曖昧になって、
おれはまたうろたえる
どうやら魅入られてしまった、
たったひとりおれだけが
不信と倦怠、
そして猜疑にすら
なんだか裸にされたみたいに地面と、
そして突きだた腹の肉を見る
仕事が終わってみなが帰りを急ぐ
おれがウィルキンソンを呑みながら、
列車にゆられ、
室にもどって考える、
いままでしでかしてきたことを

それについて詩を書く

いや、

それよりも

かれらがおれになにを求めるのかを知りたい

おれは撰ばれてしまった

なにがおれを撰んだのかがわからない

とにかくじぶんの詩から眼を背けたくなっって、

おれは生田川沿いの歩道まで行って、

枇杷の木を見る

その木だけが真実、そして事実、そのものだった

dance

おもいだしてみればそれが失意のはじめだったかも知れない
かの女がもはや会えるはずもないことを知っておれは傳いた
そんなことをおもいながら、
事実ということのそっけなさをおもう
ながいためらいのなかでおれはすべてを手放した
なにもかも好きにすればいいだろうって、
ひとりごとをいいながら過ぎ去ったものたちから
じぶんを切り離すことになった
清掃車がおもてをいく
濁点を垂れ流して
表通りへ抜ける
やがてひとびとが路次を歩いていく
真夏の声、そして浸透する暑さ
風景が立ちあがっていくんだ
養老院のむかいで
おれは窓を眺め、
朝という朝のありきたりな気怠さを感じてる
失った若さと、残された贅肉を抱え、
失意のはじまりについて考察をめぐらすとき、
そのときだけ、かの女のおもざしがさっと脳に射し込む
かの女のみじかい髪、少年性、そしてやわらかい声を
もはや、それはおれにとっての画材になり、
詩の起点になり、つくりもののなかで老いてゆく
もうどうだっていい、
こんな哀傷からは遠くはなれて、
ひらき直りたい
おもいだしてみればそれが失意のはじめだったかも知れないけど、
いまとなっては太った中年のたわごとでしかない
いま森のなかで実をひらく果実、
いま水となって溢れる感情、

いま神社の手水となって充たされる過古、
すべてをおれのために捧げろ
そして惜しみなく奪え
おれ以外と蚕食しながら、
8月の果てまで、
踊ってな

多くのひとは

多くのひとは雲のなかで目醒めたりはしない
水のなかで熱くなったりもしない
そして炎のなかで溺れたりもしない
したたかな晩夏の光りのなかで芽吹き、
やはりしたたかな初秋の光りのなかで凋れるものはなに？
もはや犯意を失った群小詩人のなかにあって、
わたしはひとり、草むらを歩く
だれもわたしのことを知らないということの不安を
だれもきみのことを知らないという事実で埋めようとしてる
質問？——それもいいだろうけど、
けっきょくは表面をなぞっただけで、
なにもわかり合えないということ
たったそれだけの事実がわたしに詩を書かせる
箒に寄りそう木枯らしみたいな、つつましい事実よ、
眠れ、眠れ、眠れよ
きみたちのために寝台は空けておいたから
もう大丈夫、大丈夫だといいかけてやめたのはなぜ？
きっとふりまわした花みたいになにもかもが奪われて死ぬ
だからか、外套を投げてビルの屋上を歩きたい
多くのひとは雲のなかで目醒めたりはしない
水のなかで熱くなったりもしない
そして炎のなかで溺れたりもしない
だのにわたしはそうでもしなければもはや、
生きるのもむつかしい
きょうで港湾労働も終わった、
しばらくはだれとも会わないでいるだろう
アパートの床に素足を立てて、
やがてわたしは雲のなかで目醒める
水のなかで熱くなる
炎のなかで溺れる

そうともさ
きみは？

in without way

秋が暮れる、
地平のなかで
ぼくはまたしても秋草を盗みとる
なんでもないというふりをして、
けっきょくは檻のなかで坐るしかないみたいだ
きみの手紙を待ってる、
きみらすべての手紙を待ってる、
もちろんそんなものがないことはわかりきってるのに
もしきみが応えてくれたなら、アルコールをやめられるかも知れない
どこにいるのかもわからないひとよ、褐色の上着をいまずぐに脱いで、
枯れた枝にかけたまえ、どこにいるのかもわからないひとよ、
きいろい便箋に青いインクのパイロット万年筆を入れておいたよ
だからそれで手紙を書いてくれないか、
それで託けをしてくれないか
もしぼくがためらいのなかでまちがいを犯したとしても、
それはぼくのことであって、きみのことにはならない
いま、andy shaufを聴いてる
それがたぶん癒やしにでもなるだろうから、
でも、こんなざれごとにはもうたくさん
両の手いっぱいにあふれた秋草から、
とびきりのひと葉を奪い去ってくれ
そしてもはや、
とどかないところへ
旅だってください
じゃあ、元気で。

それはまるで毛布のなかの両手みたいで

いまでもこの場面を路上で叫ぶものがいる
幾晩も眠れない夜を送った
夜のほころにはそんな人間ばかりががらくたみたいにいる
いまのわたしがどうなっていくのかを観察しながら
燃えあがるスカートを眺める
水鳥が死んでる
片手には斧、
もう片手には愛が咲く
それはまるで毛布のなかの両手みたいで
あったかいんだよ、アグネス
でも追いつめられるんだよ、アグネス
みんながそれぞれの通信のなかで、
蛸壺に落ちただけなら、
技術なんておとぎばなしだ
光りが歩く
警笛がたちどまる
かれらかの女たちは始めたんだよ、アグネス
けれども放送が突然に切られて、
信号が変わる
表通りで自転車が発狂し始めたのを皮切りにして、
町のひとびとが凶器に変わった
いや、それを撰んだとっていい
エリンは燃えながらワンピースをゆらして踊った
ケンゾウは新聞記事で家を建て、
ステイーヴンは星狩りの舟に乗り、
それぞれのちがったおもざしを光らせて、
第7惑星の空にちらばっていった
わたしが聴いたのは
最後の2小節、
警告と発展だけだった

ジェーンがキヨコの手を握って、
なにも形成されないところで起きた、
現在が発生する、磁場の衝撃波がしている
そしてそこにいまはもうだれも残っていない
けどアグネス、きみは受け入れることができるんだよ

夢の定着液

蟻塚によじ登る夢を見た
じぶんがアリクイになった夢
過古からやってきてはやがて現在へと定着する夢
落ちてきた不運をみなスクリプトしつづける夢
ぜんぶがじぶんの不始末からはじまってる
それが夢のなかの、
あらゆる穴に符号する、
ゆるい神経痛だ

「ダニエラの日記」をだれか買っておいでくれ
いつでも悪夢を見られるような、
仕組みが欲しい、
つまりはいつでも、
眼を醒ましてゆっくりと、
現実を定着できる液体が欲しい

旧十和田駅、
製材所があったあたりで泣き声がする
そうさ、まさしく人間が泣いてる声だった
しかしその駅すら、もう2年まえのまぼろしだ
果たしてそれはほんとうに人間だったのか

アリクイの鼻が鳴る
定着液が誤って零れたんだ
ぼくはもう人間には帰れない
どうか人語で話しかけないでくれ